

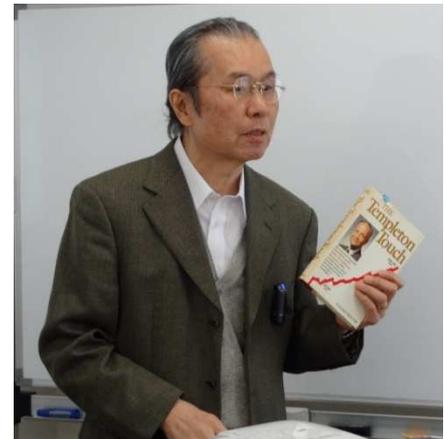


I-OWA マンスリー講演より 『テン플トン・タッチ』を読み解く

講演:岡本 和久、レポーター:川元 由喜子

ジョン・テン플トン卿という投資家は、ひと言で言えば「バーゲンハンター」。極端に割安になっている銘柄を買って、忍耐強く待ち、大きく儲けるのです。生涯のうちに、いくつもの伝説的バーゲンハンティングを行っています。また、とても誠実で真摯な人柄で、投資においても精神的な面を非常に重視します。

表題の「テン플トン・タッチ」はギリシャ神話に出て来る「ミダス・タッチ」から来ています。ミダス王は手の触れたものが全て黄金に変わる力を授けられたのです。すると、手にする食べ物がすべて金に変わるようになって、むしろ不幸になったという逸話です。その対極にあるのがテン플トン・タッチ。テン플トンが触ると、幸せの根源となるのです。投資家が良い判断を下し、良い投資を最高の投資に変えるための耐久力を与えてくれる。物質的な利益を、他の人々の為に使う喜びと能力を与えてくれる。そんな意味があります。



自分と関わりのあるすべての人を喜ばせることを究極の目標と定め、努力を厭わず、儉約に努める。そして借金をしない。これらが基礎となる考え方です。その投資哲学の第一は、もちろんバーゲンハンティングですが、社会・政治に幅広い認識を持つこと、柔軟であること、前向きな発想で、単純明快に考えることなどが、特徴的です。

彼の人生においても、伝説的な重要な投資判断というのは、ほんの数回です。その最初のケースは 1930 年代。アメリカはまだ大不況の中にありましたが、欧州で戦争が勃発したことを機に、アメリカ経済の力強い回復を確信しました。戦争が始まったヨーロッパに対して物資の供給者になると考えたからです。この信念に基づいて、その時 1ドル以下だった、倒産企業 34 を含む 104 銘柄を、100ドル分ずつ買い付けました。見通しはうまく当たり、平均 4 年保有して全銘柄売却した時には、実に 4 万ドルの資金を手に入れました。これが、自分で投資顧問業を始める元手となりました。



長期投資仲間通信「インベストラ이프」

次に非常に大きかったのが、日本株。1950～60年代、日本経済は高度成長を続けていましたが、株式のPERは非常に低かったのです。テンプレトンは、日本人の儉約、焦点を絞った決断力、勤勉さといったものを非常に高く評価しました。若いころ、世界27か国を旅して回った時の経験で、知っていたのでしょう。50年代初め、外資規制があったので、自己資金で投資を始めました。80年代になって日本に注目する投資家が増えたら売却を始め、ピークで60%まで投資した日本株を、バブルが始まる前、80年代初めには2%まで下げました。カナダ、オーストラリア、アメリカなどに、もっと魅力的なバーゲン銘柄があったからです。

講演では、米国株の上昇相場、韓国・中国株、ドットコムバブル崩壊の予言など、この後に続く数々の伝説的な投資成果が紹介されました。その他、テンプレトン卿の人となり、生い立ち、投資の金言集、フィランソロピー活動などについて、お話いただきました。最後に、「投資で成功するための3つの直観的要素」。①祈り、②静修、③富を分かち合う、ということです。